



男の妊娠出産

県立南部医療センター  
こども医療センター  
長田 信洋

手術室のベテランナースが妊娠出産のため休職することになり、オペ室内でささやかなお別れパーティーが開かれた。参加者一人一人がお祝いの言葉を述べ、生まれてくる子の性別や子育ての苦勞にまつわる話など、悲喜こもごもの話題で盛り上がった。多くは「女性は大変だよねー」という視点での話であったが、その中で男性看護師が、「妊娠出産の気分ってどんなものかなー」と、経験できるのなら経験してみたいようなことを口走り、皆から「ホントかよー」と嘲りの眼差しを受けていた。その時「男の妊娠出産」というテーマの記事を、昔 Lancet だったと思うが、医学雑誌の中で読んだ時の記憶がよみがえり、それを皆に振ってみた。

「アンケート調査をすると、米国では 20~30 代の男子の 4 割近くが妊娠出産を経験してみたいと答えているらしいよ」。

「へーそうなの」。

「そのため、それを本気で研究している人たちがいて……」と、決して夢物語ではない話を披露した。

研究者たちによると、男性の骨盤は女性と比

べて狭いため、骨盤腔内に受精卵を着床させても満期までは持たないとのこと。そのため考えられている男性妊婦の着床場所がなんと陰嚢。

昭和 30 年代の銭湯ではフィラリアに感染した大きな〇〇をかかえた人を見る機会があったが、今では知っている人も少ないあれだ。陰嚢は 10 カ月の胎児を抱えるくらいには大きくなるらしい。風呂敷に包んで首にぶら下げると歩行も可能で、仕事もやれるそうだ。

「え〜っ、わたし妊娠中、陰嚢に向かって話しかけるのっていやだ〜」。

それもそうだ。

「え〜っ、じゃあ緊急陰嚢切開ってオペもあるわけ？」。

さすが手術室ナース、反応が早い。

「生まれた後の伸びきったアレって、たたんでパンツに納まるかな？」。

主婦はたたむのがうまいが、男はどうだろう。

「オレって陰嚢から生まれるのっていやだなー、絶対いじめられるよね」。

完全に引き気味の心臓外科医。

それぞれがあまりの奇想天外さに戸惑いながらも、オペ室の中は爆笑の渦に包まれた。

「でも生まれてきた子は、生みの親をお父さんと呼ぶわけ？お母さんと呼ぶわけ？」

「う〜ん、そうだな、とても困るだろうな」。

はたと皆が考え込んだ時、年配ナースの一言。

「お袋さんでいいんじゃない」。

オペ室の中は、いつも非日常的な会話が飛び交っているのです。



心臓手術風景：小児の心臓にメスが入った、緊張した瞬間をとらえた絵です（制作者：長田信洋）